

十九世紀イギリス思想史の若干問題

— 功利主義への對決の一系譜 —

木村正身

乏しき思索を、十五年間不斷の光明もて導きたまい、激勵と溫慮を惜しまれざりし偉大の師父の御靈前に、不肖の弟子たるを顧みずつたなき小稿を捧ぐ。

周知のように、近代イギリス社會思想史の研究領域には、「功利主義」Utilitarianism という踏みならされた廣場がある。

「功利主義」が「最大多數の最大幸福」の教義であるにしても、その客觀的な本質や系譜や外延をどう規定するかについてはいろいろの見方がある。いま、あのマルクスの端的な規定を⁽¹⁾べつとしても、八〇年代のイギリス社會主義者たちはすでに、功利主義をたんに觀念的または實踐的當否の對象としてばかりでなく思想的考察の對象として、十九世紀イギリスの社會經濟史を基盤とする新興ブルジョアジーの實踐の教義にほかならなかったという點を認識しているらしくおもえるが、この點をはじめて本格的な社會思想史の方法視角のもとにとりあげたのは周知のようにレスリー・ステイヴンで、かれはみづから功利

主義の使徒たることを認めつつ豊富な分析と內在的理解を三卷の勞作にしめしたが、ペンタムとミル父子を各卷の標題に掲げながら、實際にはむしろ子ミルの死までの十九世紀イギリス思想史（『十八世紀イギリス思想史』の續篇）を包括的に書いたのであって、さらに、ペンタムにおける立法の經驗科學としての功利主義が本來經驗的なためには歴史を重んぜねばならぬのに科學的たるうとして陥った歴史的視點の缺除を、後期のミルやグロウトやオースティンだけでなくバックル⁽²⁾もが補完したとみたとき、H・スペンサーとおなじ Evolutionism を功利主義に包攝しえたかわり、功利主義そのものの本質や外延の規定を、いかにもイギリス人らしく、不明確なままに残した。グロウトやベインやダイシイやウォラスの研究も、本質的にはステイヴンの線に沿うとみてよい。他方、エリイ・アレヴィイの勞作は、大陸的視點からイギリスにおける功利主義をもつて、せまく一八三二年の選舉法改正を頂點に編成され、約十年の生命をもつて活力を失う「Philosophical Radicalism」の思想、すなわち Westminster Philosophy (London Review, etc.)

十九世紀イギリス思想史の若干問題

と同義に解し、功利主義史の課題をフィロソフィカル・ラディカリズム形成の思想的系譜の探求とかがんがえ、合理主義・個人主義の兩指定に立脚した「利害の自然的同一原理」(經濟)と「利害の人為的同一化原理」(立法)との矛盾をはらむ統一のうちに把握し、この統一が崩れる瞬間に問題はおわるとみ、かくて後期のミルは勿論 Manchester Philosophy (ノブデン、ブライト)をも考慮外におくことによつて、功利主義をばチャドウィック體制確立とともにあつた狹義のベンタム主義と規定するといふ回顧的解釋の原型を興え、かつその大陸的系譜を重視したのである。J・プラメナツツもまた、功利主義者の登場を十八世紀半ばから十九世紀半ばまでとするが、かれは觀念倫理學の立場から果敢に功利主義の教義を最大公約數的四命題に集約・限定し、四大指導者中にヒュームを加え、かつアレヴィの大陸系譜重視觀を排し、功利主義の培養基としてのホッブズないしイギリス經驗論を重視する。しかしかれの研究は、功利主義の各理論家の論理構造の觀念的に嚴密・機械的な分析にすぎず、功利主義は今日では崩壊して後繼者をもたぬとの結論は、社會史との關連の完全な無視の上に抽きだされる。

さて以上、アレヴィは功利主義の起點を、ステイーヴンやプラメナツツは子ミルまでの進行期を、それぞれ問題にしたわけだ、同時に功利主義研究の代表的諸視角をしめすものだが、社會思想史の觀點を缺く場合をべつとすれば、これら諸研究は全體として、功利主義が、そのどの時期についても、けつしてた

んに偶然の超歴史的・超社會的なヘドニズムの十九世紀的表現形態ではなく、一定の歴史段階でのイギリス特有の新興ミドル・クラスの巨大な社會意識形態であり、またその意味でその「個人主義」も無條件のものではなく、ミドル・クラスのための「社會主義」が潜在的に豫想されていたことを示唆している。

さらに、功利主義はイギリス産業革命終期の經濟的自由と政治的不平等への社會的實踐のラディカルな二つの理念の一つとして出發したが、この二つの理念は三年選舉法共同闘争では統一されたとはいへ、じつは本質的に異なる系譜のもので、一つがやがてチャーティズムを盛りあげるジャコバン的・大陸的な先驗的・革命的自然權思想であつたのにたいし、他はイギリス(イングラント)特有の經驗萬能・妥協・改良の思想で、この後者が功利主義の母胎であつたことが、立證されてゐる⁽⁶⁾。

(1) K. Marx, Das Kapital, Bd. I, Abschn. VII, Fusz. 63.

(2) Leslie Stephen, The English Utilitarians, 3 vols., 1900, esp. Vol. I, Preface, and pp. 1—11.

(3) Ibid., Vol. I, pp. 297—8, 301, 304; Vol. III, pp. 156, 317, 347—375. なおステイーヴンの本著作には結論部分がないのが興を惹く。

(4) Elie Halévy, La Formation du Radicalisme Philosophique. Eng. tr., The Growth of Philosophic Radicalism, 1928; ed. 1952, esp. pp. 15—18, 486—514.

(e) John Plamenatz, *Mills' Utilitarianism* reprinted, with a Study of the English Utilitarians, 1949, esp. pp. 1-10, 145-160.

(e) Stephen, op. cit., Vol. I, pp. 289-295, 307-8; Halévy, op. cit., pp. xvii-xviii, 130-140. なおこの點、エンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の狀態』のなかですでにヴィクトリアン・ブルジョアジーがミドル・クラスと等義なことをするべく詳論しながら、他方でかれをデイドロオ、ブルードン、シェリイ、バイロンと無差別に賞揚するという若さをしめした (Marx and Engels on Britain, Moscow 1953, p. 275. 邦譯「マル・エン選集」補卷2、三五九ページ)。それだけに、やがて事態を識つたマルクスのペンタム攻撃はすさまじかったわけだ。しかし、功利主義が『エルヴェシウスその他十八世紀のフランス人たちが既に語っていた氣のきいたことを、ただ氣を抜かして再生産しただけである』(力點筆者)という規定を、思想的にはわれわれはただ逆説としてのみ受けとる。

二

ところで以上の諸見解は、いずれも功利主義をミルまでに限定考察するが、人々はミル以後についても功利主義を語りうるようだ。しかしそれは、十九世紀前半の支配的なドクトリンの餘韻にすぎぬとみるべきか。われわれはこの通説を疑問とす

十九世紀イギリス思想史の若干問題

る。ただし、まず第一に思想の相對的繼承という點からいえば、外面的にみても、まず時代の指導的思想家 J・S・ミルは周知のようにコウルリジ的理想主義の加味を分配的問題にかぎり、ハリエットのラディカリズムに追隨しきれず、ついに「合理主義の聖者」(グラッドストンの評)⁽¹⁾としてペンタム主義の枠内にとどまるとみられるし、ステイヴンやダイシイが今世紀初頭に功利主義史を語りながら、なおみずからはユーティタリアンだったという含意が注意される。H・ラスキもそうである。さらにフエイビアンたちは、バーカフ以下がひとしくアナロジカルに論じたように、「最大多数の最大幸福」の旗印を掲げなおしたその外面的任務においてペンタマイトたちと酷似するところがある。しかし問題は外面だけでない。思想の基本的内容において、ペンタムにはすでにレッセ・フェールの克服、「社會主義」認容の條件が潜在的に與えられていた。すなわち功利の原理は個人主義的とはいえ、本來市民たる個人の合理主義なのであり、市民社會を抜きにした快樂主義や無政府の個人主義とけつして同一物でないのだから、その體系樹立者ペンタムが實踐の處方にあたってしめした重要な、しかし功利の原理とは元來無關係な歪曲——equality にたいする security の優位——を修正するなら、功利主義はかえって當初のデフォルメされた形態(レッセ・フェール)から脱出し、本來の Civil rationalism ないし philosophy をとりもどすことになる。その意味でペンタムにすでに潜在していたイギリス「社會主義」が顯

在化したのが、フェイビアン的「income maintenance」と「福祉國家」の思想にすぎない。そしてこの表面的變容と基礎的同一は、ミルやフェイビアンたちの、またT・H・グリーンやL・T・ホブハウスらの「個人主義」「自由主義」についての周知の一連の新解釋の發展に、またそれを裏づける經濟理論の展開 (pleasures and pains 計算の具體化たるジェヴォンズの限界效用理論と、リカードウ・ミルの分配理論の終點たる劃一的 rent 理論との「統一化」⁽⁶⁾に、立證せられるであろう。狹義のベントム主義の外延としての古典派經濟學がその勞働價值論をマルサス・ミル・フォースットの線で放棄し、この眞空を主觀價值論で埋めて理論的本質を變化したときに「新古典派」が誕生するが、しかもこの過程をつらぬいたのはまさに utility の原理という思想的な糸にはかならなかつたし、事實ベントム・父ミルのラディカリズムとフェイビアンのそれとは、斷絶するのではなく、鞍部は子ミルおよびジェヴォンズの社會改良論によって、なまぬるく、しかし圓滑につながれるのである。フェイビアンたちは、シヨオを先頭にマルクス主義に接近した時期には、レッセ・フェールと等置したベントム主義をばげしく攻撃したといえ、たちまち『どんな修正主義者たちがやつたよりも迅速・完全に』(E・R・ヒーズ)「マルクス主義の呪縛」から解放され、ミルを率ずるウェブを先頭に社會改良——「Benthamite approach to socialism」(クロスマン)——に還り、Welfare State の建設に向う。だからデイヴィッドソン

によれば、utility とはすなわち welfare であり、功利主義とは一つの成長そのものである。⁽⁹⁾ 功利主義の以上の哲學と實踐の統一された融通自在な特質は、かつてチェスタトンの言った「Victorian Compromise」と同一物であり、⁽¹⁰⁾ またこの妥協によってこそ、以上のような縦の繼承關係の全體が同時に不斷に横にも、時代の他のすべての思想(なかんづく自然權思想)を制壓屏息させたのであることが注意される。そこで、A・D・リンゼイが、功利主義が十九世紀イギリスを支配しただけでなく、『その影響は、われわれがそれを意識することをもっともすくない場合でさえ、われわれのうちになお力づくよく作用している』(アレヴィ前掲書英譯版への序)と述べる含意も、了解される。

第二に、社會史との關連では、われわれはさきに功利主義がイギリス新興ミドル・クラスの社會意識形態だということを推定したが、いったいイギリスの「ミドル・クラス」とはなにか。⁽¹¹⁾ その詳細な考察はべつとしても、とりあえずわれわれはただちにまず古くは獨立自營のヨーマン・タイプを、ついでにはトニーイ・M・ウェーバアやグレットンの研究とともにあの十九世紀の強靱なビュアリタン・タイプを、⁽¹²⁾ さらににはヴォルテールやモンテスキューを驚嘆させたジョージアン・イングランドの町人・タイプを、想起する。⁽¹³⁾ その次にわれわれの問題とするヴィクトリアン・タイプが来る。そしてこれらの共通點は、それらがいずれも各時代のイングランドの stalwart な新興ブルジョア

アジーだったことである。またそのミドル・クラスは、十九世紀末以來さすがにイギリス資本主義の展望が『Vision from scareへ』(ホブハウス) 轉するのにも照應しおびたらしい Mittel-stand¹⁶ 的要素(フチ・ブルジョアジー)を加えるにつれて社會主義へのバイアスをしめすが、しかもなお『イギリス國民の頭腦とリーダーシップと組織力の源泉』だといわれる。R・ルイス¹⁷ A・モウドは、尺度についてのあらゆる博識をもつてしてなおミドル・クラスの現代的定義の困難を嘆ずるとともに、その social mobility¹⁸ に注意し、結局土地所有者層と本來的賃労働者層をのぞく國民の四〇パーセントをとりあげてその不拔の傳統を語り、自信衰えたりとも『ともかくイギリス人はミドル・クラス國民たりつづけるだろう』と結論したが、無力・僅少の土地所有者層をのぞけば上になにも戴かぬミドル・クラスとは、とりもなおさずイギリス・ブルジョアジーのすべてなのではないか。そして各時代におけるその構成の *evolving* な變化と、それに照應するかれらの具體的社會意識形態の轉進狀況が、われわれの課題になるとしても、なおその本質は社會學的ないしドイツ的な中間階層理念と異なるといわねばならない。

以上われわれは功利主義とイギリスのミドル・クラスの併存・照應の關係と、近代イギリスにおける兩者の壓倒的かつ彈力的な支配狀況を略観した。ついでながら、功利主義の壓倒的外延を確認するため、われわれはケインズの功利主義への對決ぶりを一瞥しよう。周知のようにケインズは『自由放任の終

焉』¹⁹のなかで、十九世紀初期における社會思想の *miraculous union*——個人主義と自由放任という『イングリランド教會』への歸一——について語り、『ロック、ヒューム、ジョンソン、バークの保守的個人主義と、ルソー、ペイリイ、ベンタム、ゴドウィンの社會主義・民主的平等主義との調和』のブデイングは、スミスら古典派經濟學者による私益・公益調和觀の科學化を基劑とし、前世紀の政府の無能・腐敗、個人の創意による産業革命、ダーヴィンの自然淘汰必然觀などの添加混合に助けられて出来上ったが、これは結局十九世紀の日常政治哲學がすべての良きものを統一しようとする實踐に成功したからだとしたが、このときケインズは思想形成のマジナルな問題點をするどく把握し、短章のうちに思想史家としての資格を證示するとともに、論理上は思想を歴史と切り離し、機能化・偶然化し、なぜか故意にベンタムの地位を相對化しようとした跡がみえる。この理由は、一九三八年にケインズが『ブルームズベリ・グループ』の仲間に向い、かつてのケムブリジ學生時代の自分らの思想を回顧して讀み聞かせたペーバーが先頃公刊されるにおよび、明らかとなったとおもわれる。それによれば、ケインズたちは、倫理學の師 G・E・ムーアから感奮をもつて學びつつた *naturalistic theory* 批判の精神(「プラトニックもしくはユートピア的レイシヨナリズム」)をもつて、あらゆる一義的道德律を否定し、義務や目的をもつてあらゆる行動(社會活動を含む)から、アシシのフランシスそのけに、逃避し、もしくは

は waterspiders のように歴史と社會の両面に浮び、かくて『おなじ世代のうち、ペンタムの傳統から脱脚した最初の者、おそらく唯一の者』となれたのだが、この徹底した合理主義の輕薄さはD・H・ロレンスの嫉妬をふくむするどい批判に遭遇し、ほとんど耐えきれなかった、という。ところどころに immoral な合理主義はおそらくむしろロシヤ的で、『たしかにイギリスのものではない。』『だが私としてはもう遅い。永久に immoralist たるにとどまるほかない。』——以上の告白にさいしケインズは「ペンタムの傳統」のなかに「マルクス主義というペンタム主義の歸謬點」をふくめた。ケインズはこのいかにもかれらしい語法違反によって、ミドル・クラスの社會主義の基盤としての功利主義をすくどく把握したのだ。だが他面、かれはおそらく「ペンタム主義」のなかにあらゆる naturalistic な思想を一からげに含めようとしたのであって、われわれははしなくも毛澤東の「革命的功利主義」という表現を想起する。これは、ミドル・クラス・イデオロギーそのものの分析のためには過大な擴充であり、ラディカリズムの二つの系譜の區別を埋没させるものだが、ケインズにはこの區別はどうでもよかった。『長いあいだの迷れようとする闘い——習慣的な思想・表現の様式から逃れようとする闘い』の結果、あらゆるものから“vogelrei”⁽²⁾となったケインズは、あらためて「新自由主義者」＝機能論的メリオリストとしてミドル・クラスのもとへ舞い降りる。こうしてケインズはマルクス主義をふくむ（とかれ

はみる）功利主義の二十世紀への延長形態を、獨自の言葉で批判した。しかしこれはじつはかれの主觀的過程である。客觀的には典型的ミドル・クラスに所屬するケインズとその合理主義は、もちろん現存の資本主義とともに在り（マルクス主義憎惡）、それはエルヴェシウス↓ヒューム↓ペンタム↓J・S・ミル↓フエイビアンイズムとメタモルフォーゼされてゆく市民的合理主義が、「最大多數の最大幸福」という最も抽象的・彈力的なスローガンをもつに見捨て（あるいは、社會主義に奪い去られる）瞬間の實存形態ではなかったか。これは逆にいえば、イギリスのマルクス主義の徴々たる地位と反比例して、本來の功利主義がなおそれほどヴァリッドだということなのである。

(1) Cf. Michael St. J. Packe, *The Life of John Stuart Mill*, 1954, p. 455. 又 F. A. Hayek, *John Stuart Mill and Harriet Taylor. Their Friendship and Subsequent Marriage*, 1951. への拙稿書評（香川大學經濟論叢、二六卷三號）参照。

(2) Cf. *Political Thought in England: 1848 to 1914*, by E. Barker, H. U. L. ed. 1951, p. 152; the Utilitarians from Bentham to J. S. Mill, by W. L. Davidson, H. U. L. ed. 1950, p. 162.

(3) Barker, op. cit., pp. 190—91; M. Beer, *History of British Socialism*, Vol. II, 1920, p. 276; Leonard Woolf,

"The Early Fabians and British Socialism," in: C. E. M. Joad (ed.), *Shaw and Society*, 1953, p. 50. 43°

(4) Jeremy Bentham, *Principles of Civil Code*, Pt. I, chaps. VI, XI, XII (*Works*, ed. J. Bowring, Vol. I, pp. 305, 311—13), *Constitutional Code*, Bk. I, chap. III, sec. v (*Works*, Vol. IX, p. 18). Cf. Stephen, *op. cit.*, pp. 308—10; Halévy, *op. cit.*, pp. 45—52.

(5) J. S. Mill, *On Liberty*, 1859; *Utilitarianism*, 1863 (参照、大泉行雄『社会思想家としてのミル・ベンチョー・ミル』第三章および附録第11); *Fabian Essays in Socialism*, "Moral" by Sidney Olivier, Jubilee ed., esp. pp. 98—106; *Fabian Tracts*, Nos. 45, 69, 72, 121, etc.; L. T. Hobhouse, *Democracy and Reaction*, 1894; *Liberalism*, 1911, H. U. L., esp. p. 173; T. H. Green, *Lectures on the Principles of Political Obligation*, rep. from *Works*, Vol. II, 1901, pp. 220—229. ミルの理想主義が狭義の功利主義を攻撃しながら、基本的には功利主義といえる点、議會主義や資本主義への懐疑な態度にみられる。参照、河合榮治郎『ミル・ベンチョー・ミルの思想體系』十三—十五章。

(6) ミル・ベンチョー理論の採用について、*Fabian Essays*, Jubilee ed., pp. 3—27 ("Economic" by B. Shaw). 2

十九世紀イギリス思想史の若干問題

カードゥ分配論のブルジョア・ラディカルな要素は rent の理論に存する。かれがそれを労働価値論と結合させて土地所有者と闘ったとすれば、フェイビーニたちはそれを限界效用理論と結びつけ、ベンチョー・ベンジ・ベンジーを擁護したと主張する。その rent 理論の1元的重視状況について、*"Basis"* のほか、*Fabian Tracts*, Nos. 7, 69, 70, 142, 147, etc. 444 *Fabian Essays*, *passim*. に明確。

(7) ミル・ベンチョー、*すべてミル*『原理』を書いたのは、*ミル・ベンチョーの使徒をめぐって*、*産業自由・労働協調・利潤分配・自助の精神を説いた*が、記録に明らかに。Cf. W. S. Jevons, *Methods of Social Reform*, and other *Papers*, 1883, pp. 98—117, 118—150, 174—186, 188—193, etc. ミル・ベンチョーの教えるのは、*ミル・ベンチョーのミル・ベンチョーの教義に反して*、その限界效用論なる不平等の論理を述べた。Cf. *Fabian Essays*, pp. 14—17, 166; H. Dalton, "Shaw as Economist and Politician," in *Shaw and Society*, p. 253.

(8) E. R. Pease, *The History of the Fabian Society*, 1916, p. 236; *New Fabian Essays*, ed. R. H. S. Crossman, 1952, pp. 4—6. 444 L. Woolf の前掲論文のこの點の説明を参照。

(9) Davidson, *op. cit.*, pp. 1—6.

(10) G. K. Chesterton, *The Victorian Age in Literature*.

一橋論叢 第三十七卷 第五號

ture, H. U. L. Chap. I. "The Victorian Compromise and its Enemies." など "Fabian Compromise" といふ Fabian Tract, No. 70. 参照。

(11) 社會思想史の視角からミドル・クラス問題をつとに提起、分析を繼續されたのはおそらくわが國では上田辰之助先生以外にない。参照、同先生『國民典型より觀たる英國産業史』國民經濟雜誌、三七卷四號。

(12) この一研究として拙稿『マックス・ウェーバー資本主義精神論の歸趨』高松經專論叢、二一巻一號を参照。

(13) 上田先生の戦後の諸勞作参照。

(14) R. Lewis and A. Maude, The English Middle Classes, 1949, Penguin Books ed., 1953. フォイション協會のミドル・クラス的色彩については、上田『蜂の寓話』二四九ページ。なお、cf. A. L. Morton and George Tate, The British Labour Movement 1770—1920, 1956, pp. 172, 181, 197.

(15) J. M. Keynes, The End of Laissez-faire, 1926, pp. 5—16.

(16) J. M. Keynes, "My Early Beliefs," in Two Memoirs, ed. D. Garnett, 1949, pp. 78—103.

(17) General Theory, Preface, p. viii. なおケインズがヘンタム經濟學著作集の編集を異常な熱意でプロモウツた理由も推測できるであらう。

三

われわれは以上、行論に必要なかぎり、ヴィクトリア思想史の検討にあたりいわば縦の視角から、功利主義のミドル・クラスのかつ壓倒的な性格について考察し、それが十九世紀の思想博物館に閉じこめられるべきものでないことを確認した。さらに詳細の論證はべつの機にゆづらねばならない。この確認の必要な所以は、とくに本來的ヴィクトリア期において、かかるものとしてのミドル・クラスの教義の「自由放任」形態が、横にも、支配的な擴がりをもせたとき、それに對抗する異端的な社會思想がたとえどのようなものだったにせよ、それがいかに巨大な金城湯池と對決せねばならなかったかを、十分認識しておくためである。では、そのような對決思想として、なにがあったか。グレイアム・ハウのつぎの言葉は、問題の時期における功利主義への對決思想の二つのありかたをあらまし示唆するものとして、便宜である。⁽¹⁾

『モリスの時代までのイギリス社會主義は、ユートピア的か、または嚴密に經濟的であつたが、同時に兩方であることは概してなかつた。サスケハンナの堤上のコウルリジの理想社會や、オウエンの共同村は、第一の部類に、リカードウの勞働價值論をもとにしてマルクス主義の受容にいたる種々の社會主義は第二類に、屬する。一般に兩者は相互に語りかけることがほとんどなかつた。兩者の窮極目的はそう隔つていなかったかもしれ

がない、その方法や調子は隔っていた。コウルリジヤキリスト教社會主義たちやラスキンのように哲學的・人道主義的側面から一種の理想主義的社會主義にちかづくミドル・クラスの思想家たちと、チャーティストのように闘争の労働運動としてのそれにちかづく思想家たちとのあいだにも、おなじ對照がみられる。一方は平和的・協同的で階級闘争の場面を減らそうと努めるが、他方は戰闘的・攻撃的で成果を階級闘争の強化に懸ける。モリスは兩者の結合を試みる数少ない人物の一人だが、この兩思想は、モリスが政治的に活動する頃までは、ラスキンのとマルクスの、として要約できよう。『すなわち功利主義への對決思想は、本來のヴィクトリア期において、労働者階級自身の社會意識形態、およびミドル・クラス左派のそれ、の二つとみられるのである。

社會思想史研究の方法への反省は、われわれにつきぎのことを教えている。すなわち、ある時代・社會の社會思想をただしく把握するためには、たんにその當時の支配者たる階級のすでに明瞭にイデオロギー化され體系化・制度化された思想（ここでは功利主義の自由放任形態）のみでなく、時代の被支配大衆またはそのイデオロギーたちの思想や、またそのいまだ定型化されるにいたらない種々の日常の發想や實踐のなかの陰微でマージナルな思维形態をもあわせて、いなむしろ後者が發展的であるかぎりそれに重點をおいて、把握されねばならず、場合によっては前者を中心とする通史を書き改めねばならないということ

十九世紀イギリス思想史の若干問題

と、これである。だとすれば、支配階級としてのヴィクトリアン・ミドル・クラスの思想たるベンタム主義の分析は、その思想がとりわけこの國で縦にも横にもすこぶる強力で滲透的な擴がりをもっただけ、きわめて重要な課題であり、それはステイヴン以下の研究のあとでもなお開拓の餘地をもつにしても、むしろわれわれに残された一層切實な課題は、功利主義に對決し、かかるミドル・クラス・イデオロギーを徹底的に批判し、かかる階級の支配するイギリス社會に向け根本的な體制批判を、この國のなかでおこなつた思想の解明にあるといいうであらう。

ところでわれわれは、この體制批判を、思想家と名のつく特定のイデオロギーでなく、イギリスの lower classes 自身が實踐活動のうちにおのずと展示したのだとする見解、さらにそれにもとづきチャーティスト運動（さらにはラダイト運動）の意義を重視し、その再検討をおこなう試みとその重要な意味をも、了解している。けれどもまた反面、かかる試みが、細かい事實の分析において多くのゆきづまりに遭遇することをも、知っている。

すなわちまず第一に、この際のミドル・クラスの思想の結論としての「自由放任」の主張は十九世紀初期には「ふしぎな調和」(ケインズ)によつてジャコパン的自由の主張と一致し、三二年選舉法や三四年の New Poor Law ではじめて現實に分裂すると一般に理解されているが、しかし「自由」の概念の系

譜的・二律背反はフランス革命さきより以來つとに労働者一般によつても直觀的には認識されはじめていたとみるべく、對佛開戦・團結禁止下の London Corresponding Society 以下の活動は多くの限界をもったとはいえ、その背後の労働者のエネルギ―と市民的自由を超える平等の要求はゴドウィンの高價本をさえ普及させた點を注意すべく、また十九世紀初頭の工場立法の闘争的展開は、その契機にトリーリの温情やクエイカフ的社會改良の傳統やペンタムの平等主義をもつとはいへ、基底に労働者自身の日常的闘争意識が潜在し、したがってわれわれはこれを政治・經濟立法における土地所有者對第三・第四階級共同戦線のシェーマと、かならずしも繼起的ではなく併存的に理解すべきでありこの時期を簡單にトリーリとホイグの *live and take* の闘いの期と劃切することは許されない。社會史のこの段階に照らし、労働者階級の潜在的な社會意識の蓄積状況は、それが陽表的に實踐に成功するか否か、目立つイデオログを生むか否かにかかわりなく精査されねばならず、チャーティスト運動もこの關連で一層の重要性をもつ。

しかし第二に、それにもかかわらず、この始發期でのイギリス下層労働者（女子、幼少年、鑛山労働者を中心）の社會意識形態そのものはまだほとんど定型化されず、むしろフランス革命の意義を理解した知的熟練労働者の憤激および没落職人・小生産者層の機械への怨嗟によって代替され、しかも熟練労働者層の上昇、職人・小生産層の分解没落・二支配階級の強固な連合、

イギリス資本主義の順調な發展等は、民衆に革命の期遠きを悟らせ、大陸から輸入された革命的闘争理念の活力を失わせてゆき、かくて自然權思想にもとづく社會主義は、なるほど *Labour Economists* からチャーティズムまでの振幅をもつが、ついに當分衰絶する。「ロンドン通信協會」の理念の限界が、現實にしめされる。ロックもその自然權によってでなく經驗論によって想起されることとなる。自然權思想のにがいテストたるチャーティズムが瓦解して以來數十年のイギリスの繁榮は、あたかもあの十八世紀の *"Augustan Peace"* の分別の時代ときわめて相似的だ。——植民地からもたらす富は尨大、傳來の *domestic industry* と新興北方マニファクチュアは並んで繁榮し、原始蓄積期の社會問題は完全に忘却され、救貧法は縮小して定住法に肩代りされ、*workhouse* は生産力政策の道具と變じ、新型の町人ミドル・クラスは無數の文人やパンフレティアを動員して時代を謳歌させ、社會思想の主流を形成するが、*labouring poor* は貧乏必要觀のもとに慈善學校さえ反對され、作業場に動員される人的生産要素として顧みられず、かれら自身の社會意識も表現・記録のよしなく、マンドヴィル・ディフォウ・ボウブ・「スペクテイター」的世界にたいし、わずかにトリーリ・ラディカリストたるスウィフトの、ミドル・クラス左派の立場での陰鬱なサティアが、體制批判の精神を代替的にあらわすのみ（スウィフトとカーライル・ラスキンとの相似）。

——かくて八〇年代に入るまでは、ヴィクトリアニズムに滲透

されたイギリス労働者階級は、そのエネルギーや潜在的社會意識にもかかわらず、チャーティズムの幻滅と労働組合・協同組合運動の成功とでそれをフラストレイトされ、革命的體制批判の精神を陽示できなかったのだ。この本來的ヴィクトリアン・エイジでは、イギリスの労働運動全體が「ペンタム主義という霧」に包まれてしまう。體制批判の任務は、當分労働者自身の手から離れる。⁽³⁾

かくして問題は、ペンタム主義が初期の進歩的性格を失い、社會的良心にとつての毒霧、「マードストーンやグラッドグラインドの綱領」としてヴィクトリア時代を蔽ったとき、どのような思想がイギリスの内部で眞の體制批判精神を荷いえたか、という點である。いま、この問題につきわれわれは、しばしば「後期ロマン派」の名のもとに一括されるミドル・クラス左派（とくにカーライル、ラスキン、モリス）の思想の系譜とその役割に注目するとともに、それが從來の思想史研究ではしばしば極端に無視されてきた狀況に注意せねばならぬとかんがえる。とりわけこの系譜の末端に位置するモリスが晩年にマルクス主義者に轉化した史實の眞相と解釋をめぐり、思想の繼承・結節の問題が重大化するのである。⁽⁴⁾

(1) Graham Hough, *The Last Romantics*, 1949, p. 103. ただし、ハウのモリス社會主義の解釋の結論そのものは傳統的である。

(2) 参照、拙稿『社會思想史の内容および方法について』、

十九世紀イギリス思想史の若干問題

香川大學經濟論叢、二八卷四號。ただし他の諸論點では同稿はすこぶる未熟なことをおことわりしたい。

(3) この點の説明として、とくに Graham Wallas, *The Life of Francis Place*, chaps. IX—XI; F. W. Roe, *The Social Philosophy of Carlyle and Ruskin*, 1921, chap. I.

(4) Cf. E. P. Thompson, William Morris: *Romantic to Revolutionary*, 1955. および拙稿『ウィリアム・モリス解釋の新段階』、香川大學經濟論叢、二九卷五號。

四

「後期ロマン派」の人々の思想にかんする從來の研究の諸視角を私見により要約すれば、つぎのとおりである。⁽¹⁾

その第一は、かれらの思想の「人道主義」的要素を感佩・昂揚し、その意義を無媒介に現代に生かそうとする道學的解釋であつて、それは八〇年代の「社會主義の再興」期に母國ではじまり、ヴィクトリア時代の終了とともに頂上に達し（指導的經濟學者マーシャルへのラスキンの影響）、すぐれた使徒たちが周到迅速に準備した謹嚴詳密な傳記やクリティカルな全集の發刊で裏付けられるが、この方向は三〇年代に衰滅する（ただし、その社會改良の處方がフェイビアニズムと連絡されるときには、まれに復活）。この解釋が大陸の視野でみられる場合には、コンツの歴史實證主義やドイツ講壇社會主義との關連が説かれ

ること(前者についてはイングラム、スマート、ゲッデス、後者についてはカウフマン、ヴェンティヒの評價を想起)、またこの解釋は、とくにわが國では特殊な社會史的背景のもとに、これら思想家の紹介と同時に導入され、母國イギリスの視角は「人格主義」や白樺派や初期マルクス主義者たちの思想に、大陸的視角は國家の政策思想そのものに滲透しひさしい支配をもった事情、をあわせ留意すべきであろう。さて、この解釋方向の衰滅は直接には主として三〇年代に勃興する近代主義ないし合理主義の影響によるが、ここに第二の解釋動向がはじまる。

「人道主義」のアナクロニズムが棄却されたあと、残されるのはこれらの思想家の審美的業績のマルセル・ブルーストの評價と、これらの思想家に共通の神祕的性格のサイコ・アナリシスだけとなる。研究資料の補充ももっぱらこのような personal interpretation の角度からおこなわれる。これは現代まで母國で支配的な解釋動向といつてよい。しかしながらこの線の解釋はカーライルやラスキンやモリスを藝術思想史ないし文學史の枠へ追ひこみ、かれらは、その美文や豫言や社會改良の提案や晩年のモリスの不可解な轉進をべつとすれば、たんなる審美的・回顧的な文藝思潮の珍重すべき數ページを飾るにとどまるものとされ、社會思想史からはその地位が抹殺されてしまう。文學と社會經濟思想との重要な連繫を研究の都合で斷絶させる惡弊は、方法的根據をもつのである。第三の解釋は、かれらの社會思想史上の地位を一應みとめながらも、その表見上の復古

性にもとづき、一義的にロマン的ないし空想的反動主義者だと斷定し、その意味でやはりかれらを棄却してしまうもので、周知のようにこれは進歩派の研究陣營でこれまで壓倒的な解釋態度であつた。

いま、これらの後期ロマン派解釋は、資料に照らし、また社會思想史研究の方法に照らし、いずれも主題の取扱ひを基本的に誤っているものといふべきである。その詳細な吟味はべつにゆずり、ただちにわれわれの見解を要約的に明らかにしよう。

「後期ロマン派」——D・G・ロセッティを中心とする「ラファエロ前派」(the Pre-Raphaelites)の人々、カーライル、ラスキン、モリスらによつて代表される思想の系譜を一應こう呼稱しておく——がヴィクトリア思想史の前進にたいしてもつ役割には、積極的・消極的の二面があるものとわれわれはかんがえる⁽²⁾。

第一に、この時代の支配的思潮だった功利主義が、先述のとおり十九世紀をつうずる新興ブルジョア階級たる「Victorian Middle Class(es)」のイングランド型(ランカシャ型)の經驗第一・歸納萬能主義の壓倒的イデオロギーだったのに對抗して、そのおなじミドル・クラスにいまは吸收されることによつて生殘しつつも、あのスコットランドのプレスビテリアンの系譜を帶びた強烈な情緒と先驗的・演繹的批判精神を缺きえぬ一群の知識人層のイデオロギー⁽³⁾が、ここではかえつてアングロ・カトリシズムに轉形しつつ並行的に内包されてい——かつてはイン

グラランドの形成期産業資本の要請もだがたく、無産労働力とともに導入されたスコットランド的知性と創造的精神（Scottish Intellect, "Spirit of Projectors," A・スミス、W・バタスン、J・ロオを想起）は、ここではミドル・クラス・イデオロギーの異端児に轉形する——これら知識人たちは、いまや自分らの所屬している階級の君臨する社會が、じつは十八世紀のコンヴェンショナルな世界と根柢では變らぬどころか、自然と人間を壓殺するマンモンの腐敗した富によって從來より一層不動に築かれてゆく事實、これにおうじてこの階級のイデオロギー（ペンタム主義とマンチェスター的樂觀・妥協）があまりに壓倒的・發展的である事實、さらにこのような Whiggery と對決するはずのトーリー主義も結局大土地所有者の新時代での妥協のための無内容な方便にはかならないし、さればとて「希望」を託すべきはずの労働者も、その上層は妥協に捲きこまれ、悲惨な下層はいまだあまりに無組織・無力・無智で、ラダイト運動やチャーティズムもペンタム主義には齒が立たぬ事實、をブリテン人としては最も早く鋭敏に感得し、根柢からの反逆を禁じえないが、しかもあまりに壓倒的なミドル・クラス・イデオロギーの滲透と、自分らの階級所屬の束縛とは、かれらが直接に社會に對決しようとする意識をフラストレイトさせてしまう。この矛盾から脱出するためには、ただわずかに近代産業の發達の蔭に搖曳している自然の美や、またそれを素朴に享受した過去の直接に社會的な、『すきとおるように簡單な』

十九世紀イギリス思想史の若干問題

人間關係を、古代・中世建築やロマンズ譚のなかに透視し、これを吟いあげ、描き、刻むことによって、かくてただ最後の皆たる藝術の世界を死守することによって、消極的に反抗を表明し、一層あたらしい社會階級（労働者階級）へ批判任務の傳達を試みるはかなかった。ところでかれらはその點で立派な先縦をもち、その遺作にインスパイアされたのである（この先縦者群——いわゆる「前期ロマン派」の人々、すなわちブレイク、バイロン、ワーズワス、シェリイ、キーツなど——は「イギリスにおけるフランス革命」の動向に感奮し、ボウブ「スベクテイター」的十八世紀産業社會のコンヴェンショナルリズムの壓倒的支配への反抗の闘いを、詩のうちに見いだしていた）。かくてかれらは、藝術への實踐をつうじて、ペンタム主義にたいするこの時期の國內で唯一の強硬な體制批判者として登場したのであった。ここで念のため、イギリス労働者階級の社會意識の未成熟——上層の早くからの富裕化と妥協、下層の未組織と無智という點、したがって労働者階級自身にこの批判の任務を直接社會が授與することはいまだ不可能だった點（とくにチャーティズム瓦解後の状態）を十分再確認しておこう。さて、かれらのこのような社會意識がかれら自身に自覺され正面から表現されたか、それともついに潜在的なままにとどまったかによって、カライルやラスキンやモリスと、ロセッティやバーンジ・ウインズとの開きができる（これはゴドウィンと前期ロマン派詩人たちとの開きに照應）。しかしかれらがこのような社會意

識を自覺し陽表化する場合、二つの條件が働いていたことが注意される。第一は、この陽表化が體制批判となるためには、藝術が勞働⁽⁵⁾と結びあわなければならなかったこと。これは勿論、フィリスティニズムの體制による勞働の疎外、人間の疎外を、藝術との關連において恢復しようとしたことを意味する。第二には、かれらはこのような現存の産業資本制の秩序があまりにも鞏固で發展的なために、これにたいする直接の批判を、その批判が體制的であればあるほど、一見貴族的・回顧的ないし豫言的なかたちでしか、表現できなかったこと。以上二條件をみたして、はじめて批判が批判として外面的に成立しえたのである。つまりかれらはここでは、まず産業主義の絶對に入りこみえぬ *in art for art's sake* の世界を超現代的にまず確保し、つぎにしかもなおその藝術を勞働のよろこびと結びつけることによって批判を現代につなぎとめた。この操作によってかれらはまことに迂遠ながらそれだけ一層根本的な社會批判をおこなえたとみることができよう。いまこの事態を一括して、支配的な功利主義思潮にたいする「ロマン的反抗」と呼ぶことができる。とすれば、カーライル(前期)やラスキンやモリスの活動は、まさにそれをあらわしている。こうしてかれらは詩的・復古的なチームに訴えることによって、じつは勞働と人間と藝術がおたがい疎外しあわない限界狀況を衝き、當時としては國內で可能な唯一の體制批判の精神を維持しえたものであることが、ふかく注意されねばならないであろう。そしてこのようなロマ

ンの批判形態は、一般にそれが異端的狀況下で思想家の社會的良心のすべてを懸けて不斷にマージナルにつづけられ繼承されるとき、やがて社會史の成熟におうじ眞にあたらしい積極的・進歩的な社會思想が誕生する母胎となる點で、思想史上重要な意義をもつものといわなければならない。

しかし第二に、そのようなものとしてのロマン主義は、まずその批判的精神自體と、そのフラストレイトされた現實の表現形態とが區別されねばならぬ。後者はミドル・クラスの尺度で測られ、利用され、その無漸な殘骸がかえって前者をますます壓迫する。かれらの批判精神の最も純粹な表現であるはずの藝術觀も、現實の言葉や創作となるや否や、かえって成り上りのミドル・クラス人士の渴えていた *「base」* を充足させるものとして轉用されてしまう(ラスキンの『近代畫家論』やモリスの *wallpapers* の運命)。つぎに、かかるロマン主義の特定形態は、あくまで社會史の獨自の局面でとらえられねばならない。社會史の動きにおうずるあたらしい「希望」と進歩的な思想の成立の契機としての役目を終え、または異端でなく公認となるや否や(功利主義の伸展は、ロマン的表現形式の改良主義への轉用を可能とする)、*Revolts* の精神は完全に窒息させられ、そのミドル・クラスの系譜のゆえに、反動的なものとなってしまう(後進國ドイツのロマン主義はイギリスと逆に、國際的には異端だが國內的にははじめから公認というかたちであられる點に注意)。すなわち「後期ロマン派」は、それがアトムとして

の對等・自由な市民があつた一元的につくりあげるものとしての「市民社會」、そこで功利の原理が無條件に作用するものとされる社會においてこそはじめて、ミドル・クラスの最左端の立場で體制批判の異端的精神を荷いうるが、第一に、國內的には、グラッドグラインド的世界の重壓は詩的な反抗をすらも沈黙させる（一八五八年のモリスの詩が終點）。この情勢下での左派の態度は、所屬するミドル・クラスに絶望しつつもその枠内に踏みとどまつたんなる「文化」批判者となりおわるか（カーライル、M・アーノルド）、一步をすすめて帝國主義者に顛落するか（晩年のカーライル）、それともミドル・クラスからの離脱のための絶大な苦闘をつづけてついに抜けだせず、ヴィクトリアニズムのいたましい犠牲となるか（錯亂したラスキン。コウルリジアンとしてのミルをこれに加えてもよい）、それとも、社會情勢の推轉におうじ、「a piece of preciousness」に悩みつゝも、ついにこの離脱の *salto mortale* を見事に敢行するか（モリス）、という振幅をしめさざるをえない。第二に、國際的にみれば、すでに資本制の秩序がべつの秩序に、とつてかわられる可能性が判明したことに伴う革命的情勢と、これに對抗する現體制擁護のうごきとの對決を背景としていたのだから、その次元から一義的に眺めるなら、あの批判精神ではなくその形骸として陽表化された回顧的社會改良や審美観だけが、（ラスキンの痛切な戒めにもかかわらず）内外のブルジョアジーによって安全なものとして利用され、フェイビアンの

十九世紀イギリス思想史の若干問題

および講壇的社會改良（とくに後者）と堅く結合され、その一翼と化され去つてしまふ。逆⁽⁸⁾にまた、イギリスのロマン派の人間自身も、一方で「藝術のための藝術」の限界を悟りながら他方でみずからのミドル・クラスの系譜を處理せぬまゝにして、ひとたび直接の社會批判を有効に（妥協的に）おこなおうとすれば、史眼の喪失という致命的な代價を拂つて後進國の反動的ロマン主義イデオロギーに援助を求めねばならなくなることも、事實である。カーライルやラスキンのプロイセンの理念への志向と、帝國主義への傾斜は、まさにこの矛盾とかれらの必死の苦惱をしめす。ひとり眞の實踐家モリスの場合には、必要におうじての階級のきずなからの飛躍によって、この矛盾が解消される——「Poet Laureate」からの解放。モリスだけは國家社會主義や帝國主義にも斷乎と反對できた。だがモリスの飛躍は、ケインズの場合とはまったく異なるし、一ボヘミアンの思いつきではなく、晩年のモリスはたんなるユートピアンではない。かれの傳記と勞作を吟味するなら、社會史に照應するその思想の一貫した着實な展開がたどれるが、それは奇しくも「後期ロマン派」思想史の縮圖となつてゐる。

ヴィクトリア期ロマン主義のもつ以上二面の獨自な役割をならべ把握しておくことは、近代イギリス思想史の理解に重要だとおもわれる。「ロマン主義」といえば、われわれはしばしば文學士のもつと政治思想上のものとを斷絶させ、かつ後者についてはシュレーゲルの用語法をハラアやミュラアと結びつけて想

一橋論叢 第三十七卷 第五號

起し、市民的觀點から一義的に「ロマン主義」即反動主義という公式に安住しがちだが、しかし問題は、「近代的」にロマン主義一般を無差別に棄却することにあるのではなく、各國ごとの社會史の一定段階における特殊なイデオロギーとしてのロマン主義の具體的形態の意義と役割を、他の思想とともに慎重に見きわめることとなければならないであろう。

(1) この點の文獻指示は紙幅の關係で一切省略した。概略は、ラスキンについては拙稿『ジョウン・エヴァンズ』ジョン・ラスキン』香川大學經濟論叢、二八卷一號を、カール・ライルおよびモリスについては三節註(4)所掲の拙稿を、それぞれみられたい。

(2) 以下の説明は三節註(4)所掲の拙稿でも述べた。ここでは、基本的にはペンタム主義とマルサス人口論とに師事するオウエン・ブレイス・チャドウィックの社會改良や、大土地所有者の利害を直接に代表する議會主義的人道主義たるトーリー主義の思想、さらにドイツ理想主義の導入を標榜しつつも議會と資本制を承認するT・H・グリーンの改良思想など、いずれも體制批判ではなく、根本ではペンタム主義に順應するものである意味において、問題外とする。またコヴェントリー・パトモアのような詩人ものぞく。かれはロマン主義者と表見的に同一にみえても、その詩にみられる領主的自己満足は批判的精神を表明せず、後期ロマン派の本質たる「Revolt」の精神とまったく異質

のものである。オウエンとペンタムおよびペンタム主義との妥協的關係については Margaret Cole, Robert Owen of New Lanark, 1953, p. 66. を、ヘンリーの功利主義については G. Wallas, The Life of Francis Place, 1898; St. J. G. Ervine, Francis Place, the Tailor of Charing Cross, 1912 (Fabian Tr. No. 165) を、および上田貞次郎『産業革命史』改造社經濟學全集第三九卷、二一三—八ページを、トーリー主義の代表者チャップマン・伯の無思想については A. V. Dicey, Law and Opinion, 1920, pp. 230—31. を、チャップマンについては C. R. Fay, Life and Labour in the Nineteenth Century, 1920, pp. 97—8; S. E. Finer, The Life and Times of Sir Edwin Chadwick, 1952. を、リーマンについては坂合、前掲、ベトキンについては Derek Patmore, The Life and Times of Coventry Patmore, 1949, esp. pp. 140—53, 211—15. を、それぞれ参照。

(3) Cf. H. T. Buckle, Introduction to the History of Civilization in England, chaps. XIX—XX. イギリスにおけるドイツ精神と云うべきスコットランド的イデオロギーの地位と役割の問題は、その重要性にもかかわらず、バックル以来いまだほとんど未展開といわねばならない。

(4) モリスだけはスコットランド出身でないが、その家庭

や幼少時の環境はラスキンの場合に酷似、しかもそれが終生の活動に決定的影響を與えていることが注目される。

(5) このような批判的精神はシャーロット・ブロンテなどにもあらわれるとされる。Cf. A. L. Morton, "Genius on the Border," *The Marxist Quarterly*, Vol. II, No. 3, July 1955.

(6) とくにこの點を指摘した研究として、Joan Evans, *John Ruskin*, 1954. をみよ。前掲拙稿書評参照。

(7) これをドイツ國內についていえば、問題の力點は逆となる。シュレーゲル・ミューラのロマン主義のフランス啓蒙主義との對抗關係は注目すべき点としても、それが國內でプロイセン絶對主義官僚の壓倒的イデオロギーとして役立つ側面は開拓された問題であって、ここではむしろプロイセン絶對主義に反抗する異端的精神がどういう系譜と

構造をもったかの方が、近代ドイツ思想史の重要課題となろう。したがってカール・ラスキンとシュレーゲル・ミューラの類似でなく相異を分析することの方が、はるかに重要だといふべきである。たとえばわれわれはむしろ、"Pre-Raphaelite Brotherhood" に照應するものとして、"Junghegeleianer" を想像した。

(8) ドイツ講壇社會主義の「倫理」とイギリス的「藝術」との相互補完の深い可能性については、H. Wentig, *Wirtschaft und Kunst*, 1909, SS. 6—45, 411 ff.

(9) キリスのノートブックの科學性は、*News from Nowhere* よりむしろ *A Dream of John Ball* における主人公のジョン・ボール批判に端的にあらわれている。

(香川大學助教授)